

2015 1/27

No.1987

毎月第2・第4火曜日発行

政経 かながわ

一般社団法人
— 神奈川政経懇話会 —



第24回よこはま国際ちびっこ駅伝大会（神奈川新聞社など主催）が17日、横浜市港北区の日産スタジアムで行われ、駅伝とロードレースの両部門で計4181人の小学生が健脚を競った。



contents

視点・点描	3
合併で明るい展望開いて	
講演録	4
シンポジウム「2015年の動向を読む」	
コーディネーター 神奈川新聞社論説主幹 中畠 弘孝	
パネリスト 共同通信社政治部長 鈴木 博之	
共同通信社経済部長 谷口 誠	
共同通信社外信部長 儀間 朝浩	
政治反射鏡	9
まだら模様の地方活性化 「全国津々浦々」はどこへ？	
国際	10
欧州覆うイスラム・テロの影 現実化する「文明の衝突」	
経済	12
10年で激変したIT起業環境 日本企業はベンチャー活用を	
暮らし2015	14
親の家を片付けるこつは？	
広告珍談	16
うまい物もろもろ⑥ 透ける広告！	
NNAアジア経済レポート	17
神奈川景気データファイル	18
神奈川景気データファイル	19

事務局だより

◇横浜定例講演会

2015年2月9日(月)

13時30分～15時

新横浜プリンスホテル 3階

「セレナーデ」

講師はダイヤ精機株式会社

代表取締役の 諏訪 貴子 氏

演題は「中小企業の経営改革
と人材確保・育成」

視点 点描



合併で明るい展望開いて

横浜の農業に明るい展望を開くよう強く期待したい。

横浜農業協同組合（JA横浜）と田奈農業協同組合（JA田奈）が今年4月に合併する。事業の効率化などが狙いで、「横浜農業協同組合」の名称を引き継ぎ、組合員数は6万2千人超となる。

JA横浜は、貸出金残高や貯金残高で全国トップクラスを誇るが、田奈が加わることで、その基

盤は一層、強固なものとなるだろう。田奈の職員らは希望があれば、引き続き雇用するという。「新生

JA横浜」では、両者が心を通わせて、一体となって組織の運営を進めてほしい。

JA横浜は2003年、市内の五つの農協が合併して誕生した。以来、横浜市ではJA横浜とJA田奈の二つの農協が、独自に活動を展開してきた。

合併にあたっては、「県下7JA構想」を掲げる県農業協同組合中央会（JA県中央会）からの指導を受け、検討に着手。13年7月には「横浜地区JA合併推進協議会」を設置し、本格的な取り組みを一步一歩進めてきた。そして、「横浜はひとつ、JAもひとつ」

を合言葉に、両者は協議を続け、昨年11月に市内で合併契約書の調印式が催され、実現にこぎつけた。

それぞれの組織に組合員の培った歴史があり、合併までの道のりもけっして平たんではなかったと思う。組織の枠を乗り越え、「都市農業の維持・発展に向けて合併は必要」と考え、尽力した組合員、関係者には敬意を表したい。政府は農協改革の方針を示し、環太平洋連携協定（TPP）の行方も現状では、まだ明確になっていない。農協には従来よりも厳し

いものが求められる時代となっている。そのような中、新生JA横浜には、370万人都市の横浜で農協が一つとなるスケールメリットを生かし、しっかりとした経営基盤を築き、組合員や地域住民から信頼され、消費者のニーズにも応える取り組みに力を入れてもらいたい。

特に望みたいのは、若手農業者の育成だ。昨年10月に厚木市内で開かれた「かながわFARM21発表会」（JA神奈川青壮年部協議会主催）の審査員を務め、都市農業の魅力や意義を力強く伝える県内の若手農業者に引きつけられた。ぜひ、未来を担う若手が生き生きとハママの農業を発展できるよう支援してほしい。

（神奈川新聞社経済部長

石曾根 剛）

透ける広告！

まず、下の広告をご覧あれ。2つの広告だけど、1つの広告である。どうしてか？

新聞は紙である。紙は透けるのである。その特性？ を生かした広告である。

左の広告と、右の広告。新聞のウラとオモテに掲載された。つまり左の広告とおなじ位置のウラ側に、右の広告が印刷された。いわば、表裏一体の広告！

といっても、右の広告は「反転」されている。コピーを読もう。

左の広告に「何だろう？ 透かして御覧」。右の広告には「裏面から透かして御覧」

左には「イヨー ステキだ！！ 実にうまい！！」。

右には反転文字で「最高級 理研酒」、大きく「利休」。これが商

品のロゴである。

新聞を透かして見ると、ひょうたんのイラストの中に、「最高級 理

研酒」とロゴの「利休」が反転ではな

く、正常な文字とロゴがびったり重なって見えるとい

う訳。みごとなアイデアではないか。

1930(昭和5)年10月31日、朝日

新聞に掲載された。もちろん、同じ日である。

ひょうたんは「瓢箪」と書く。

「瓢箪」と書く。

瓢はひさご、箪は竹で組まれたま

こんどは酒を入れて2・3日どち

掲載

るいおひつのこと。ひょうたんの中身をくり抜いて乾燥させ、酒を入れるうつわを

らも数回くりかえすと、やつと臭いがとれるという。

「瓢壺」という。

《瓢箪鯨》という大津絵（近江国追分辺りのおみやげで、民芸的な絵画）がある。襦袢1枚のオト

とは、のんびいのボクにはたま

コが、ひょうたんでナマズを取り押さえようとする図柄。ぬるぬる

らない語句である。

したナマズを、丸っこいひょうたんで捕まえようとしても無理。つかまえどころのないものの例えで

しかし酒器にするまでが、た

ある。また《瓢箪の川流れ》とは、うきうきして落ちつかない様子

いへんらしい。しつかり成熟す

たとえという。「ひさご」とも「ふくべ」とも

るとこれが果実だったのかと思

いうひょうたんは、おめでたい形である。正月、祝いの客にひょう

うほど、皮が固くなる。それを

たんの皿や小鉢で供すると、それだけで話がはずむ。もちろん、瓢

ネなどを取り除いて空っぽにする。

壺で酒をすすめるのはいうまでもない。

る。つぎは濃いお茶をさまして

（美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住）

入れて2・3日、

（図）透かし見る広告・1930

（昭和5）年10月31日・朝日新聞

掲載

